

展景

季刊

No.116



Winter 2025

目次

「戦雲」〔短歌〕 糸魚川〈短歌〉 わが令和六年回想〈短歌〉 餅つくる〈俳句〉 ヨーガ教室〈短歌〉 〈那須通信 61〉触れることは 〈薫風颯々 35〉禅林寺永観堂	…………… …………… …………… …………… …………… …………… …………… ……………	梅津純子 小野澤繁雄 河村郁子 新野祐子 布宮慈子 加藤文子 神村ふじを	4 6 8 10 12 14 20
----------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------	-------------------------------------

対詠 〔まげんいかげ〕 PART 92 前号作品短評A 前号作品短評B 無二の会短信 編集後記	…………… …………… …………… …………… ……………	小野澤／河村／布宮	24 26 29 32 36
-------------------------------------------------------------	-------------------------------------------	-----------	----------------------------

今号のイメージ／ホースラディッシュ

「戦雲」

梅津純子

「戦雲また湧き出るよ」ミサイルの基地に抗ふ老女の唄声

石垣島の即興の抒情詩とばらーま

「あの時に反対の声上げてれば」悔やまぬためにと牛飼ふ男

与那国島

「私たちは〈多少の犠牲〉に入つてるね」子らと山羊飼ふ女の抵抗

宮古島

太ももを刺したるカジキをつひに仕留め快哉叫ぶ海人おぢい

うみんちゅ

全島民島外避難の計画ぞ畑を潰し海を埋めて

闘つたその事実こそ子孫への宝と語る辺野古の老は

「戦雲」予想を超ゆる人ら観る秋の行事の重なる中を

小さき声世に届けむと四十年余若かりし友の髪も白みぬ

資金無く組織も無くば前売りで経費の見通し立てる他なく

心優しき人と待みて自が心励まして訪ふ前売りの日々

糸魚川

小野澤繁雄

糸魚川そういう川はないという呼びだしてよむ駅の案内に

案内に海が見えるがそのさいしょ能登半島が今日はみえない
のり鉄の旅ともいえぬ旅ながら展望台に海をみており

駅前の通りにあつてその表示海拔五メートルそれもうごいて

「塩送る」舞台となれどそのみちの起点のまちに下車をしたもの

荷物もつ人が多いか大糸線北の区間にツーリストたち

ビル街にそらみる感じ谷間は頭上のそらに雲をみていて

駅がもうモニユメンタルなものになる鉄道もまた近代が発

さまざまにしることありて大町市それに谷村町いずれ経過を

神の裁きを待つ者ら特急は夜のあずさの床にすわりこむ

わが令和六年回想

河村郁子

元旦の祝ひ最中の能登地震 早鐘打つがに心中乱す

相共に華道家元教授へと励みし澄雲さん門前町に居る

三月にわれは卒寿を祝はれる 四日後義兄は黄泉へ旅立つ

七月に亡母の三十三回忌うから揃ひて仏事落着

梅雨明けの前の猛暑に熱中症の警報止むなく保身ファースト

温暖化阻止は当為地球とて生きとし生ける 守り継ぐべき

人類を育み生命を永らへる火の扱ひには倫理あり

原子力も必需の世なれば核兵器廃絶あるのみ人類護らん

拝火教在りても原子力拝む畏敬の念の無きを訝る

被団協のノーベル平和賞受賞 地上くまなく警鐘ひびけ

餅 つくる

新野^{にいの}祐子

一粒一粒艱難越えて今年米

身支度は白一色に帰り花

湯気に頬かがよう冬の漢たち

塩旨し搗き立ての餅引き立てて

肌触り赤子や象や餅を伸す

冬の蠅やっぱり「五月蠅い」と言われ

餅搗き唄あるらし我ら青春フオーク

玄米餅配る脚気になるな雀どち

掃除終え褒美のごとき冬夕焼

紛争地の空しんどかる白鳥来

ヨーガ教室

布宮慈子^{やすこ}

晩秋のある日ギツクリ腰となり寝ねられぬ夜を過ごししことあり

衰へは明らかかなりて何かせむ体操せねばと大反省す

この町にヨガの教室あるとふを同級生から聞きたるやうな

役場にはスポーツ振興係あり体験参加を即申し込む

水曜日ふはふはと雪降りてをり初参加となるヨーガ教室

気持ちよく伸ばす首筋ゆつくりと回してゆけば雪の空見ゆ

猫のポーズ程よく背中が伸びてゆく緊張させたり緩めたりして

内へ内へ自分の呼吸をせよといふ先生の声とほくに響く

ヨーガとはただの体操ではなかつた一つひとつの余韻を味はふ

週一のヨーガ教室通ふため今朝は車の雪を下ろしつ

触れることは

加藤文子

九畳ほどの部屋で調理、食事、接客や事務や手仕事などいろいろこなしている。

四人掛けのテーブルとイスの他、低くて細長いアフリカの木製ベッドや書棚、小物タンス、タイルをはめ込んだスペイン製の引き出しつきテーブル、ピアノのイスなど、よくもまあこんなに……と、自分でも呆れるほど持ち込んでいる。

部屋の中央には、台所と食卓テーブルの仕切りを兼ねてくくりつけの棚がある。板を数枚横に渡した作りで、どちら側からも物が取り出せる。

上から三段目くらいまでは、陶や木製やシルバーのオブジェなど気に入った物をとりとめなく置いている。出し入れしやすい高さの四段目五段目に、日常使う茶わんやコーヒーカップや皿などの食器を並べている。

装飾的なものと日常雑器が同居しているのもオカシなものだが、食器戸棚もないので他に持って



いきようがないのだ。

物が多いわりには圧迫感がないのは、天井がなく吹き抜けのせいかと思う。

調理台もあってないようなもの。水切りカゴの前にまな板一枚置くのがやっとで、他に何も置けない。

切った野菜はボウルに入れていったん水切りカゴに置いて、工程をすすめる。そのため、調理の時は水切りカゴを物の置き場として使えるように、洗った食器は片づけておく。こまめに片づけながら調理するのも忙しいのだが、段取りを考えながらやりくりしている。

時々、こんなこともある。

出来上がったおかずのナベを食卓テーブルに移し、まな板を置き直してぬか床から漬けものを出しかけたタイミングで不意の来客があったりする。

大慌てでテーブルを空け、おかずやぬか漬けをガス台に集結させる。まな板を片づけて、空いた調理台でお茶を用意。

煮物やぬか漬けのにおいの立ちこめる中で接客、今日のおかずは…？ なあんて想像されながら会話しているのだろう。

毎日使う食器はまだしも、めったに使わない大振りの器やオブジェなどは、棚上で埃っぽくなっている。一掃しなければと思うのだが、棚からそれぞれを降ろして、拭いたり洗ったりを想うとな

かなか踏みきれない。

雨降り以外仕事ができない時が訪れると、意を決して上段から掃除をはじめ。

揚げものほしくない、凝った料理もしないのに、油っぽいよごれが付着しているものもある。

夫が昔つくった朝顔型やキノコのようなターコイズブルーの陶のコンポート、シルバーの写真立てやボンボン入れ、ひとつひとつ手にして埃を拭う。

黒ずんだ銀彩の楕円の皿、久々ハマギキ粉で研^ひいてみると、ブロンズ色に被われた中から隠れていた黄色のパーツが浮かび上がる。朝やけの景色のようだ。

いつの間にか忘れていた発色に思わず感嘆の声がもれる。

高台のないゆるやかなカーブを描いた変形皿もキレイに拭いて置き直してみると、我が家のギャラリーに展示してみてもはどうだろう、チョコレート載せてみるのも可愛らしいナ、そんな気も起きる。

終了後の棚は飾り方も自然に変わって、全体が明るくなって新鮮に映る。

触れることは、対象をより鮮明に感知する上でも大切なこと。事を終えたあとの心地良さにひたりながら抱く思いである。

億劫がらずにネ、忘れなさんなヨ、この気持ちを……。



棚上のコーヒーカップ

禅林寺永観堂

神村ふじを

何年も前の夏に一回訪れたことはあったのだが、紅葉の時期に永観堂の見回り阿弥陀を拜んでみたいと思い、京都に出掛けることにした。十一月初めのことである。改めてこの時期に京都に行くことが間違いだっただと戻ってから思ってしまった。

普段でも観光客しかも外国人が多いとは思っていたが、殺人的な多さで有名どころの寺院は押し合いへし合い状態。じっくり仏様を拜む余裕などまったくなかった。

しかも、京都に宿を求めることなどできる状態ではなく、ビジホも満杯で泊まる場所を探すのに苦労したのだが、ここまで混んでいるとは思わなかった。

コロナが収まってから宿泊料金が倍以上に値上がりし、インバウンドの外国人も多いために、ホテル業界はすこぶる強気である。それでも京都から二駅の大津まで戻ればビジホも空いていることがわかり、料金も京都ほどではなくリーズナブルであることがわかった。

まあ幾分鉄分が溶け込んでいる我が身としては、山形から京都までの間、沿線の風景を眺めながら、ちびちびとワンカップを口にするだけで、六角精児になったようで幸せな気分になる。

今回の旅行は、ライトアップも行われているとの情報を得て、紅葉と寺院の風情を楽しみたいと思いい、せっかく大津に宿を取ったのだからと、石山寺、園城寺を回り、山科の毘沙門堂、東山の東福寺、真如堂、禅林寺、南禅寺を巡って、大原の三千院、寂光院、そして最後に清水寺に行く計画を立てた。

考えてみると、「夜桜」という言葉はあるが、「夜紅葉」という言葉はない。1990年代に、「ねねの寺」で知られる高台寺でライトアップが始まり、次第に京都中心に広まっていった。だから「夜紅葉」は比較的新しい文化なのである。

紅葉なんてわざわざ見に行かなくても、おまえの周りの山は紅葉だらけじゃないかという声が聞こえてきそうだが、最大の目的は紅葉の中の永観堂に鎮座まします見回り阿弥陀様のご尊顔を拝することなのである。

禅林寺は、京都市左京区永観堂町にある浄土宗西山禅林寺派の総本山。南禅寺のすぐ北にある。本尊は阿弥陀如来（見回り阿弥陀）。本尊が安置されている永観堂が通称となっている。紅葉の名所として知られ、古くから「秋は紅葉の永観堂」と言われている。

当初真言宗の道場として出発した禅林寺は、中興の祖とされる禅林寺七世法主永観律師の時に念

仏の寺へと変化を遂げる。永観は文章博士の源国経の子として生まれたが、浄土の教えに心酔しやがて熱烈な阿弥陀信者となった。禅林寺を永観堂と呼ぶのは、この永観律師に由来する。

永観堂には仏様の御加護を高めるためかどうかわからないが、よくありがちな七不思議というものもある。それは、方丈孔雀の間の欄間に描かれた抜け雀、永観律師が植えた悲田梅^{ひでんばい}、臥龍廊、三鈷の松、木魚蛙、火除けの阿弥陀、岩垣もみじ、である。

中でも方丈の前庭にある悲田梅は、永観が衆生を救うために境内に多く植えていた梅の木の最後の一本で、苔むした小枝を四方に伸ばしている。今も小さな実をつけると言う。樹齢700年の老木は、質素にかつ遠慮がちに庭の片隅に植えられていた。

永観堂の阿弥陀様は立ち姿で上品下生の来迎印を結んでいる。また抱きかかえる気なら抱ける程度の阿弥陀様である。ただほかの阿弥陀様と違うのは、顔はまっすぐ正面を向いているわけではなく、美しい切れ長の目がそつと左下を向いている特異なお姿の像であり、調べればほかにもいらつしやるのかもしれないが、私を知る限り横向きの阿弥陀様はこの「見返り阿弥陀」^{*1}だけである。

この像については次のような言い伝えがある。永保2年(1082)、永観が日課の念仏を唱えながら、阿弥陀如来の周囲を行道していたところ、阿弥陀如来が突然須弥壇から下り、永観と一緒に行道を始めた。驚いた永観が立ち止まっていると、阿弥陀如来は振り返り様に、「永観、遅し」と言ったという。阿弥陀如来像はそれ以来首の向きが元に戻らず、そのままの姿で安置されている

のだと言う。

首の向きが戻らずにそのままの姿でいるところ、誰でもわかるいい加減さ嘘つばさが何となくいい。

小振りな阿弥陀様は、口元に笑みをたたえながら今日も、「永観、遅し」と言っているのだろうが、心の中ではあまりの人の多さに、「何この人たち、ヤバっ」と言っているように感じた永観堂であった。

散紅葉碧眼巡る京の町 ふじを

*1 この随筆を書き上げた段階で、山形県米沢市堂森の善光寺阿弥陀堂に、見返り姿の木造阿弥陀如来立像(県指定文化財)が安置されていることがわかった。見識不足であることを申し訳なく思っています。

* 永観堂ホームページ 阿弥陀如来立像(みかえり阿弥陀) <https://eikando.or.jp/mikameramidat.html>

N K O
 小野澤繁雄
 河村 郁子
 布宮 慈子

暖かき一日となりて山形は芋煮会とふ季節を迎ふ	11月16日	N
かりそめのバスとはならぬ峠越えさわがしくしてのり降りの人	11月19日	O
道の辺にひとと生えぬしゑのころぐさ小さき穂先に冬は来にけり	11月30日	K
ぼんやりと窓の外が白く見え開けてみれば雪の朝なり	12月7日	N
雪でもよかったような大屋根に雨よけをして師走善光寺	12月10日	O
雪国の雪映像をうらやむも乾燥続きの保身はマスク	12月20日	K
内窓を付けし居間より眺めぬる雪の降り方まこと美し	12月27日	N

あしもとのそこから山上までが雪車窓なれども世界あかるし	12月29日	O
乾燥の続く夜空に一会あり東に木犀西に金星	12月30日	K
クリスマス寒波の来たるこの冬は大雪ならむ何とはなしに	12月31日	N

2025年

その家の軒端の花の蠟梅をコースひとつは目的にする	1月3日	O
乾燥の続くさ庭の沈丁花小さき花芽を育みてをり	1月6日	K
雪国の成人の日は何となく降らねばよいと空を見上げつ	1月13日	N
ざらざらぶにぶに蛇の触感をある子こうにも触れる催し	1月16日	O
わが成人は七十年前 大学生 「自立」 掲げた就職願望	1月18日	K
山形のサッカークラブも始動して映像届きぬ鹿児島キャンプ	1月22日	N

●畑には虫来て鳥来て蛙も来土といふは生きもの養ふ

布宮慈子

畑を始めたという。そんなことで多くの歌に野菜が登場する。野菜なので、カタカナが多く、また畑仕事は身体活動、言葉もリズムカルに運ばれる。前半では野菜とのやりとりが、後半では、土とのやりとりや、やや反省的にそれが詠われた。この歌は後半のもの。初めてのものもある。

初めてのものを植えれば毎日のやうに気になる小玉スイカよ

畑仕事ひとつの活動になっていて、その背景にはスタイルとして(の)不耕起栽培や自然農法がある(ことになる)。

つれあひの選びし農のスタイルは不耕起栽培また自然農法

ここから、一連のおわりの歌の「青々として」も出てくる。畑(一連タイトル)は、畑仕事である。青々が目に浮かぶ。「土といふ」もの、畑も。

草多き畑を眺めて人は言ふ お宅のはたけ青々として

●隣席の人のささやき耳打ちを聞き取れぬと知る四十路の慄き

梅津純子

これは問題の発端。四十路の慄き、とここでは整理した云い方になっている。あとの展開は、若き上司のその早口を聞き取れず(二首目)、同じ話を聞きたる人との受け止めに違い(三首目)、などときて、この歌。「話が違ふ」(五首目)も含めて、慄き、のその説明になっている。

否か応か肝心要語尾にあり人往々に語尾のむにやむにや

往々に、は往々にして。ポジティブな意味ではつかわれないう。否か応か、肝心要、慣用句が頻繁につかわれた。左耳難聴と判定される。後半は、補聴器の話。

行方不明の高額補聴器二冬後スキーウェアのポケットより出づ

その人に合わせて調整されるので、高額になると聞いたことがある補聴器。二冬後は、ふたふゆごと、と読んだ。この歌の「ポケットより」が一連タイトル。

眼鏡の蔓マスクの蔓との三重を避けて作りし耳穴補聴器

まだややマスク社会。じぶんも先に眼鏡を外してからマスクを外している。そうしないとマスクの蔓が眼鏡の蔓にからんでしまう。みな現実感のある歌の一連。

●帰省子は選択の余地なしと言う「ベジファーストでね」と並べる夕餉

大橋千佳子

これは、息子さんとのやりとりか(二首目に息子さん)。ベジファーストは野菜をさいしよに食べることを推奨する食事法で、健康にいいという。選択の余地なし、は出されたものを食べる立場

にあることから、あるいは夕餉そのものが野菜中心になっている、ということからか。面白い、親子の関係も出ている。

お盆前後のこと、が一連のタイトル。介護保障保険に加入したこと、樹木葬という選択肢、息子さんのやりとりに出されたのがこれら。以降は参加した(元)教え子たちの同級会のことか。それぞれ心配でたまらなかつた幾人、男子の声、彼の夢、君ら、中堅。

「えらいね」と「がんばったね」のほかは無し社会に生きる君ら逞し

さいごの歌は違って、こんな歌、

ヒヨドリよ残りの粒は分け合おうブルーベリーのネットを外す

ヒヨドリとこちら側とで分け合う、と読んだ。文明のこんな歌が浮かぶ。

朝々に霜にうたるる水芥子となりの兔と土屋とが食ふ(『山下水』)

前号作品短評B 〈慈子〉

● 不作為ということになりたる梅畑は落ち梅ひとつみることのなし

小野澤繁雄

やはり全国的に梅は不作為だったのだろうか。山形の近隣でも、梅がなくて梅干しがつくれないうち聞いた。しかし、奇跡的にわが家では梅をたくさんもらってきた、友人知人に分けるほどだった。このように地域で梅が生る生らないなど、現実的な歌も実感としてわかって面白いものだ。

時間まだのこっているやカインズに砥石が減って買い換えており

カインズは規模の大きなホームセンターだそう。カインズという名は知っているが、近隣に店舗はない。時間はまだ残っているのだろうか、の「時間」とはカインズの営業時間のことか、はたまた自分の買い物の残り時間をいつているのか。どちらでもいいわけだが、暮らしぶりを映すように「砥石」がクラシックな味を出している。今どきのホームセンターは何でも置いてあり、生活感がある歌である。

● 中空のまんまるお月様眺めりて父よ母よと月見をしのぶ

河村郁子

作者にとって、月見は父母らの懐かしい思い出につながる符号なのだろう。「お月様」という言

い方が、子どものころの自分に返っている様子である。

疎開どき祖母さま月見て言ひたりき「月と親とはいつも良いなも」

戦争中のことを知る人も少なくなってきたが、確かに疎開はあったのだ。「なも」は、軽く感情を添えていう終助詞で「ね」くらいの意味。疎開先では厳しい生活だったはずだが、おばあさまのゆったりした会話は変わらず、助けられた思いだったのかもしれない。

思ひ出づ秀山荘に山靴を求めて仰ぎし駿河台の月

若者がみな山に登っていた時代があった。山用品といえは秀山荘というくらい有名な店だった。今はもうない。作者は駿河台の月を思い出し、エネルギーだった自分を振り返ったのだ。秀山荘を知っている世代としては、なんともいえず心地よい歌である。

●杉皆伐魍魎のごとく竹煮草

新野祐子

題名の「竹煮草」は、夏の季語。俳句季語便覧を調べてみると、「荒れ地や野山のどこにでも生える大型の草では裏も茎も白っぽい。花は茎の頂にこまかくつく。果実が風に音をたてるので、『ささやきぐさ』ともいう」とある。山の杉をぜんぶ切ってしまったので、そのあたりは荒れ地となり竹煮草で覆われたのだ。「魍魎」は、山林・木石から生ずるといふ人面鬼身の怪物（広辞苑）というから、恐ろしい景色である。怒りをおぼえた作者は、たまらず次のような行動をとって、おの

れの心を鎮めるのだ。

乱心の吾をかなかなの中に置く

「荒野に希望の灯をともし」は、アフガニスタンとパキスタンで三十五年にわたって病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた、医師・中村哲さんの生き方を追ったドキュメンタリー映画である。作者たちが企画した自主上映会は大盛況だったようだ。

カンパ箱びつくり箱となり白秋

さわやかに笑み交わし合い帰るかな

◆二〇二四年十一月十日の「戦雲」上映会は、午前午後とも会場の視聴覚室七十人の机を外して、九十余りの椅子席がいっぱいの入場者だった。明日にも雪の季節到来かと言う時期、誰もが畑仕事や文化行事で多忙を極める中で、二時間十二分という映画の長さにもかかわらず、強い集中が感じられた。アンケートの内容も濃いものが多かった。ウクライナやガザの戦争をマスコミで眼にしても、沖縄の先島諸島に自衛隊のミサイル基地が、住民の反対運動の続く中で出来上がり、要塞列島と化していることは知らないでいたのだ。

私達の太陽の子の会は、一九四四年前灰谷健次郎の小説『太陽の子』の映画化作品の上映運動で出会い、以後四十四年間映画や講演会などを開き、沖縄や反戦、子ども、女など、疎外される側から考えてきた。沖縄の人々の、圧倒的な力の前に諦めずに闘い続けるその声に勇気をもらいながら。三上智恵監督の「今からでも遅くはない、共に目撃者となり今という歴史を背負う当事者になつてほしい」という声が胸にひびく。

梅津純子

◆大糸線をのりにいった。学生時代、合宿で木崎湖にいったとき、仕事に就いてすぐ、グループで燕から檜までを縦走したとき、区間でのつたことがあるが、通しでのつたことがなかった。北から、およそ県境で車両をのり継ぐ。北側がJR西の、南側がJR東のもので糸魚川からのワンマン一両の運転スタツフも、南小谷で折り返し、もどつてゆく。乗客は外国人も多く、とくに荷をもつ人、そこにみたのはグランツーリスモのワッペンのようなもの。紅葉の頃には、二両編成もあるということだったが、土曜日、一両で混んでいた。多くが南小谷で、特急にのり継いでいる。南下という言葉があるが、ここまでは、ひたすら谷間をのぼつてゆくので、下がつてゆくイメージの関東とは違う。大糸線を通しての人はいまいかわずか。目的地というものが無い旅は、印象もただ通過してゆくようだ。帰り、上諏訪からあずさののつたが、これが座席未指定券というもの、すわれないまま、外国人も含めて多くがデッキの床にすわりこんだ。苦行だった。

小野澤繁雄

◆空が鉛色になり葉山のつぺんが白くなると、間もなく里にも雪が降る。まだ大丈夫だと思つている矢先、雪が降つてきた。畑には白菜、大根を残したまま。妻から収穫を急かされると雪は野菜を甘くしてくれると言いつてみたものの、寒いし冷たいし最悪だった。毎年のことながら冬は暑い夏よりも嫌だ。山形県人は炬燵の中で丸くなって春が来るのをじつと待つ。「しづり雪撫針茸の縮む朝」

神村ふじを

◆昨年、パンデミック・コロナが5類に移って、何とか日常を取り戻したが、今年は猛暑に見舞われた。冷房は、十月になってもお世話になり、老人には電力消費は個人単位になり心苦しく思われた。温暖化の故と言われるが、地震に噴火に洪水、乾燥と大火など天変地異を伴う異常気象の現象が際立った一年だった。まだ年内に何が起こるかわからない。常に、あらゆる異変に対処出来るように心がけたい。

河村郁子

◆畑仕事を傍らにして、毎年十月下旬から三月いっぱい餅搗きに明け暮れている。ひたすら肉体労働で神経も使うので、文芸に親しむ精神的余裕はまったくないといっている。それで今回の投句は休みにしようか、でも、それはつまらない。労働のことを句にすればいいのだ、と思い付いた。私たちの会では、会員と友人たちが減農薬で栽培した餅米を餅にして、ある比較的大きな生協に卸している。これが会の経営の柱なので、製品にして出荷するまで気が抜けない。一シーズン約五トンの米を加工するのだ。改めて句にしてみると、この仕事、なかなか楽しいのではないか。「疲れた、疲れた」とばかり言っていないで、もっとおもしろい句が作れるのではと思えてきた。いま農業は後継者不足で危機に瀕している。農地がどんどん荒地になっている。それをこの餅の製品化で何とか食い止めようと、七十歳を前にした私たちは踏ん張っているということでもある。

新野祐子

◆初冬から年末にかけて、それぞれの活動の様子がわかる作品が多かった。また、インバウンド（内向きに入ってくる意。外国から日本を訪れる観光客やビジネス客のこと）というのか、旅に出ると外国人が多く見られるようだ。特に有名な観光地・京都では、朝早く行かないと寺院に入れないと聞いた。だいぶ前のことになるが、冬の京都は静かでよいと出かけたことがある。どこの寺も人が少なくてゆつくり観覧できたし、南禅寺の辺りものんびり歩いた記憶がある。あのころの静けさは、もう望めないであろう。

◆寒中である。昨年の秋にマンション暮らしから一戸建てに変わったのだが、やはり寒さは厳しい。しかし、内窓を設置したりビングはあたく暖房の熱も逃げにくいため、ふわふわ降る雪をきれいだなあーと眺めている。見とれていて、翌朝の雪かきことは完全に忘れている。夏にアルミサッシの掃き出し窓に内窓を取り付けるまでは、断熱についてかなり学んだ。ユーチューブ（動画）やnote（文章と写真）、Voicy（音声）など、自分から求めれば補助金のことも含め、ほとんど無料で教えてくれる。学習しながら、疑問があれば工務店に訊いて、納得して工事してもらった。そうはいつでも、家の全部を依頼するには至らず、年末年始もずっと自力で断熱の作業を続けた。考えられる断熱は全部おこなった感じ。やっと一段落ついたところだが、そろそろ春のきざしが感じられる今日この頃である。内窓については思ったより効果が大で、みなさんにおすすめしたいと思っている。

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊展景
116号

二〇二五年一月二十七日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

info@muninokai.com

Copyright © 2025 MUNINOKAI. All rights reserved.